

久世恭子著『文学教材を用いた英語授業の事例研究』

(ひつじ書房 2019年10月)

竹野 純一郎

中国学園大学

Junichiro TAKENO
Chugoku Gakuen University

本書（『文学教材を用いた英語授業の事例研究』ひつじ書房、2019年10月）は、EFL環境にある日本の大学での授業事例から英語教育における文学教材の意義を再検討した研究書である。英題は *A Reexamination of the Role of Literary Texts in EFL Classrooms through Case Studies* であり、シリーズ言語学と言語教育の第38巻として出版された。

著者である久世恭子氏は、本書の略歴によれば、津田塾大学学芸学部英文学科卒業後、外資系銀行勤務等を経て、米国 Manhattanville College にて修士課程 (ESL) を修了し、都内の大学で教鞭をとる一方、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻修士課程（社会人特別選抜）、そして、博士課程を修了している。本書は、久世氏が2016年9月に東京大学から博士（学術）を授与された博士論文「英語教育における文学教材の意義—事例分析による再検討—」*The Role of Literary Texts in EFL Classrooms: A Reexamination Through the Analysis of Case Studies* がもとになっている。

本書では、かつては日本の英語教育の中心に位置していた文学が、コミュニケーション能力育成を重視した昨今の教育改革の流れの中でどのような変遷を辿ってきたのか、英米での文学利用の歴史や理論を踏まえた上で、これまでほとんど検討されてこなかった日本での英語授業における文学利用の実態を明らかにしようとしている。英米では1980年代前後に、主として教育的文体論の影響から言語教育における文学教材の価値を見直す動きが起こり、理論的な議論や実証的な研究が求められるようになっていった。しかし、文学作品を使う目的やコンテキストなどを考慮するとデータ収集はまだ十分とは言えないため、日本の大学における授業事例を詳細に分析することで、文学の意義と問題点の再検討が試みられる。同時に、異なる条件下での文学教材の活用法について提案がなされる。

本書は7章から成り立っている。全体を概観したのちに評者としてコメントを加えるには分量があり過ぎると判断し、以下、各章の概要をまとめ、当該章に関するコメントを記すことを一対とし、それを繰り返すこととする。

まず第1章では、序論として、日本の英語教育における文学教材の意義について議論するという本書の目的とそれを達成するための4つの研究課題が示される。その後、「英語教育」「文学、文学的」「文学教材」などの用語が定義される。本書は、日本での「外国語としての英語」(English as a Foreign Language [EFL]) 教育が議論の中心である。「文学」という用語については、より広い意味を持つ英語の“literature”を念頭に置きつつも明確には定義せず、先行研究で示されてきた特徴の中でその中心

に位置するものを意味することが確認できる。文学教材に関しては、創造性があり、想像力に富み、ある程度解釈の自由が読者に与えられるようなテキストが文学的と見なされ、小説・詩・戯曲・随筆・児童文学・歌詞・手紙・自伝・日記などの作品ジャンルが研究対象であることが明らかにされる。

書籍として400頁を超える本研究書を読むにあたっては、書名にも含まれる「文学教材」という用語に対する筆者の立場を十分に理解しておく必要がある。文学と聞いて“*canon*”（文学の正典）をイメージする読者がいるかもしれないが、本書で扱われる文学作品・教材はより広範囲のテキストである。本書を読みはじめて評者がすぐに気づいたことは、文章が非常に読みやすいということであった。これは決して内容が平易であるという意味ではなく、著者の論理展開や文章能力が優れているからであると判断できた。4つの研究課題は、1) 日本及び英米の第二言語・外国語教育における文学教材利用の歴史について、2) 英語教育における文学教材の意義と問題点に関する従来の主張について、3) 日本の大学の英語授業における文学教材使用の実情と学習者の反応について、4) 事業事例に見られる文学教材の意義と問題点に関する従来の主張の確認及び問題点の解決法について、と要約できる。本書を通じて、それぞれの課題に対する答えが追究されるが、該当する章については、段落初めに分かるように記しておく。

第2章は研究課題 1) と対応しており、日本国内と英米を中心とした海外両方の文脈での、英語及び外国語教育における文学利用の変遷を辿り、そして、文学教材利用についての先行研究が概観される。文学作品利用の変遷では、明治時代初頭から現在まで日本の英語教育において文学教材が周辺に追いやられていた歴史を振り返る。一方で、英米の英語及び外国語教育では、教育的文体論とCLT (Communicative Language Teaching) の発展を主たる要因として文学教材が再評価された経緯が紹介される。日本で文学教材の再評価が進まない理由として、文学を用いる際の教授法が文法訳読式に結び付くなどの固定観念や経済界の要請から実用英語が過度に重要視されてきたことなどが論じられる。文学教材利用の先行研究については、文学教材の意義を支持する実証的な研究が紹介される。

著者はあとがきで、「学生時代に修めた英文学とアメリカで勉強した英語教授法の両方に関わることから興味を持った分野」と述べている。評者は、着想と本研究の視点・解釈が独創的であると考えていたが、著者の経歴がこの研究を芽生えさせたのだと理解できた。英米で教育的文体論とCLTが発展を遂げ、文学教材の再評価へとつながった経緯についても本章で確認できる。教育文体論についての知見は、東京大学で斎藤兆史氏の指導を受けたことも本書へ反映されているものと思われる。

第3章は研究課題 2) と対応しており、英語・外国語教育の中で文学教材を用いることの意義やその問題点が議論される。先行研究を踏まえて、文学教材の意義は、「言語に関する意義」「感情や人間形成に関する意義」「文化に関する意義」「その他の意義」の4つに分類される。それぞれの意義について詳説がなされたのち、Edmondson が1997年に発表した文学教材の意義に対する反論が紹介される。文学教材使用に伴う諸問題については、1980年代後半に Hirvela が発表した「語学教師が文学を避ける5つの理由」という論考を端緒に、読解や評価の難しさ、コミュニケーション能力やESP (English for Specific Purposes) /EAP (English for Academic Purposes) との関係における問題点が議論される。

本章では、文学教材を支持している著者が、文学教材の意義に対する反論や語学教師が文学を避ける理由などの問題点を議論している。評者が好感を覚えたのは、その議論の展開がバランス感覚に優れている点である。受け入れるべき主張は受け入れ、受け入れがたい主張は受け入れがたいと判断し

ているが、偏りのない中立性を保っている印象を受けた。第3章まで読んだあたりで、著者の先行研究に基づいた説得力のある論の運びに気がついた。どれだけの文献が引用されているのか気になり数えたところ、日本語・英語の書籍や論文など約250もの参考文献が確認できた。

第4章では、次章で行う事例研究の方法と対象事例の概要が説明される。事例研究の目的は、教室実践と学習者の反応を綿密に調査、記述、分析することによって、日本の英語教育における文学教材の意義や問題点を論じ、その上で、文学利用の方法を探ることであることが提示される。そして、事例研究の方法論が説明される。研究手法は、主に文学教材を用いた授業実践や観察であり、教室内談話やライティングの記述の質的分析であるが、授業対象者に対するアンケート調査結果の量的分析でサポートする質的・量的両方の性質を持った混合メソッドを採用する旨が述べられる。実際の事例研究における、研究倫理的な問題についての配慮も詳しく記されている。章末には、各事例の条件や扱う文学作品(教材)、採用するデータ収集や分析の方法をまとめた一覧表が付されている。

本章から、本書の中核部分である事例研究に関連した章になるが、依然として説明は先行研究なども参照しながら綿密である。本章末には、各事例の条件や扱う文学作品、データ収集や分析の方法が一覧表に分かりやすくまとめられており、何がどのように行われたのかを理解するのに非常に役立った。評者としては、本書の優れた点の一つとして、Tableの使用が非常に効果的であることも挙げておきたい。

第5章は研究課題3)と対応しており、本書の核となる事例研究である。著者自身が授業者となっているものも含め、研究対象となる大学英語授業の全22の事例が8カテゴリーに分類されている。それらは、「伝統的な教授法を用いた事例(4例)」「Language-based approachesを取り入れた事例(3例)」「Communicative Language Teachingにおける文学利用(4例)」「Compositionの題材に文学を使った事例(4例)」「Extensive Readingにおける文学作品(1例)」「ESP/EAPに文学を取り入れる試み(2例)」「マルチ・メディアを使った事例(3例)」「言語横断的授業で用いる文学的な教材(1例)」であった。研究事例について、授業内容の記述に加えて、アンケート・インタビューによる学習者の反応をデータとして分析し、それらに基づいた考察が行われている。

本章だけで208頁が割かれている。事例研究に関する前章と次章も含めれば合計256頁に及ぶ。最も過去の事例が2006年度、最新の事例が2015年度であることを考えると事例研究だけでも10年を超える。事例研究は、授業内容やアンケート・インタビューによる学習者の反応を記述し考察を行う手法がとられており、統計を駆使した量的な所謂科学的な研究ではないかもしれない。それでもなお、本書の事例研究の記録はその価値を一切損なうことなく、考察は理論と実践に基づいており説得力がある。多岐にわたる事例研究を、これほど長期間、丁寧に観察し記述していることに関しては、敬意を表するほかないというのが評者の率直な思いである。

第6章は研究課題4)と対応しており、第5章で8つのカテゴリーそれぞれについて行った考察を総合し、第3章で整理した、英語・外国語教育の中における文学教材の意義と利用する場合の問題点の枠組みに従って、文学教材使用の意義が再検討され、文学教材を使用するに当たって克服すべき問題点が議論される。問題点については、建設的で具体的な代替案が提案される。

本章では、文学教材の意義として、「言語に関する意義」「感情や人間形成に関する意義」「文化に関する意義」「その他の意義」、文学教材利用に伴う問題点として、「文学読解の難しさ」「コミュニケーション能力との関係」「ESP/EAPとの関係」「評価に関する問題」「その他の問題点」が論

じられている。膨大な先行研究調査に裏打ちされた知識を有する著者が、長年の年月を費やした事例研究を分析し考察を行っている。文学教材利用に関する批判や問題点についても、論拠を示しながら整然と反論すべきところは反論している。評者は、前章でカテゴリーそれぞれについて行った考察を総合し、第3章で整理した問題点について回答する本書の構成に賞賛を感じた。本書で扱われた多数の先行研究、多岐にわたる事例研究を整然とまとめることは、並大抵ではない労力を伴う作業であったことは想像に難くない。

第7章では、各章の要約と結論及び改善点と今後の課題が記される。結論として、文学教材は、洗練され選び抜かれた言語表現、多様な言語活動を生み出すことができる文章を特徴とし、言語、感情や人間形成、そして、文化理解に関する意義を有する日本の英語教育において特別な役割を担い、学習者の解釈する力や創造性を育む教材に十分なり得るとの結論が示される。

本章では、各章の「要約」がなされ、「結論」及び「改善点と今後の課題」が述べられ、「おわりに」で締めくくられる。今後の課題で著者が計画していると述べているように、研究を継続していく中で、大学英語教育における文学教材の利用についてだけでなく、より広い範囲を対象にして、どのような基準でどの作品を選び、それらをどのように効果的に使うかについてまとめていただきたい。そして、研究から得られた知見を英語教育界に還元し、文学教材を用いた英語授業の発展をこれからも牽引していただければと考える。

最後に、東洋大学附属図書館の教員著作紹介で確認できる、本書に関する久世恭子氏の教員メッセージの一部を引用する。

本書で取り上げた事例はいずれも大学英語教育におけるものですので、文学を用いた授業と一緒に体験し、文学教材の持つ様々な意義—洗練され選び抜かれた言語表現、多様な言語活動を生み出す豊かなテキスト、楽しみや感動・学習への動機づけを与え、解釈する力・創造力・文化的な理解を育む特質など—を感じていただければ、著者としてそれに勝る喜びはありません。

本書の魅力の一端でもこの書評で伝えることができたならば、評者としてそれに勝る喜びはないと考える。研究室や図書館の蔵書として、本書の魅力が幅広く共有されることを切に願う。

引用文献

東洋大学教員著作紹介「【著作紹介】文学教材を用いた英語授業の事例研究 [2020年6月更新]」
Retrieved from https://www.toyo.ac.jp/library/academic_book/academic_book2019/9784894769878/